

# アダム、スミスの生涯と其著作（其一）

## （生誕二百年記念）

武 藤 長 藏

We are told that nothing will serve in science but the blackest ingratitude; we must bow to no other authorities than arguments; we must forget our own people and our father's house. It seems in human to forget the first makers of our arguments; and the hardest worker among us will not be losing time if he commemorates Adam Smith on his 200th birthday, on or about June 5th 1923.

Adam Smith, 1723 and 1923 by Dr. J. B. B. B.

（雜誌 *Economica* No.8. June, 1923 所載 Dr. J. Bonar 氏論文の一節）

## 緒 言

本年（大正十二年西曆千九百二十三年）は經濟學史上三ツの意味に於て記念すべき年であると思ふ。其第一は本年はアダム、スミス（Adam Smith）（1723—1790）の生誕二百年に當つて居るスミスの生誕日は一般には六月五日と云はれて居るが實は日附は判然しないが本年六月で滿二百年である事は疑ない。第二にデ

アダム、スミスの生涯と其著作

ビッド、リカルド (David Ricardo) は西曆千八百二十三年九月十一日に死んだから本年九月十一日は永眠百年に當る其日より丁度百年前に彼は死んだのである。第三にジョン・スチュアルト・ミル (John Stuart Mill) は西曆千八百七十三年五月八日に永眠したから本年五月八日は彼の永眠後五十年に當る。それ故私の希ふ處は此等經濟學史上最も重要な三巨人を記念する爲に私の微力のゆるす限り何等かの勞作を發表したいと云ふ事は私が不肖の身を以て本年より本校に新に選擇科として設けられた經濟學史を擔當するに至つたからのみではなく私の學徒としての衷心の願である。しかし本誌には「アダム・スミスの生涯と其著作」其(一)を掲げ、又別稿として「ジョン・スチュアルト・ミル略年譜」を載する事とした。私は其外に「アダム・スミスの名、其生涯、及其學說等を早く我國に傳へたる蘭文經濟書」なる考證論文を京都帝國大學經濟學部の經濟論叢「アダム・スミス生誕二百年記念號」に寄する事に決した。こは静岡師範學校所藏本「エベルト・ウイレン・ド・ロイ氏 (Evert Willem de Rooy) 著歐洲經濟學史 (Geschiedenis der Staatshuishoudkunde in Europa)」下卷の第四百八十二頁及四百八十三頁に「アダム・スミスの學說に就て記述しある部分に紅唐紙の貼附しありて確に何人か、それ等の部分を讀

みたる形跡ある事を私が一昨年(大正十年)夏休暇静岡の同校に於て發見したる以後研究考證したる結果を論文に綴つたものである。(この静岡師範學校所藏ド、ロ―イ氏著歐洲經濟學史下卷第四百八十二頁の部分は本年(大正十二年)正月再び同校を訪ひ其部分を撮影したるものを複寫してそれを本年六月五日本校アダム、スミス生誕二百年記念會の折私は記念繪葉書の一ツとして加へて置いた)

私が今茲に掲ぐる「アダム、スミスの生涯及其著作」と題する一文は私が本校内のスミス生誕二百年記念講演會に於て同じ題目に就て述べたる處と其内容に於ては必ずしも同じではなく講演には時間其他講演の性質上述べ得ざりし處又其後の研究を加へて茲に發表したいと思ふ、但しスミスの生涯及び其著作に就ては既に先人の多く論じ盡したるものあるが故に普通に知れて居る事は省略しむしろ此論文にては私が往年スミスの郷里其他スミス關係地を訪ひ集め得た資料又見聞した處を加へて書いて見る積である。

(附記) アダム、スミス立像の説明

巻頭に掲げた *Wealth of Nations* の著者としてのアダム、スミスの肖像に J. R. M. Cullock 版 Adam Smith's *Wealth of Nations* 巻頭に掲ぐる。アダム、スミスの立像の複寫で別に珍しくはないがスミスの像として珍奇なるものよりも

アダム、スミスの生涯及其著作

これが一番私の氣に入りて居る、往年牛津にて Prof. Cannan に其御宅で御目にかゝつた折キヤナン教授はこのスミスの立像の話をされ支那人の辯證の事などにも話の及んだ事を今も思ひ出す。本年六月發行の雜誌 *Economica* No. 8 の巻頭にこの同じ肖像が掲げられキヤナン教授のスミスに關する論文 Adam Smith on 'Twentieth Century Finance' ナー氏のそれと共に載つて居るのは兩氏の好みも私と同じく一致して居るのではあるまいか。

### 第一節 誕生

アダム・スミスは今より二百年前西曆千七百二十三年(我享保八年)にスコットランド(Scotland)ニアイン州(the County of Fife, Fifeshire)海岸の小都會 Kirkcaldy (Kirkcaldy) に生れた其誕生日は判然しないが假に六月五日と見做されて居る其六月五日なる日は實はアダム・スミスが生れて洗禮を受けた際の證書即ち受洗證(baptismal Certificate)が六月五日附である (Notes on the Life Times and Relics of Adam Smith by John Y. Lockhard Read to the Kirkcaldy Naturalists' Society on the occasion of the Opening of the Society's New room in Pet Marjorie's House, 130 High Street, on the 11th March 1913. 參照)

スミスの生れた日が六月五日と斷定出来ない事は本論文の始めに引用したドクトルボナー (Dr. J. Bonar) 氏が倫敦の經濟政治學校 (London School of Economics and Political Science) の雜誌 *Economica* 第八號(本年六月發行)に Adam Smith, 1723 and



1923.と題する論文のはじめに記せし一節中に

..... Commemorates Adam Smith on his 200th birthday,

on or about June 5th, 1923.

とある事によりても察する事が出来る。

而してアダム、スミスの父は同じくアダム、スミスと稱し其子の誕生前少なくとも八週間前に永眠した。

(附註).....at least eight weeks before the birth of the Child, whose baptismal certificate is dated 1<sup>st</sup> June 1723 John Y.

Lockhart の Notes に記す。

スミスの父は Kirkcaldy 地區 (district) 税關吏 (Comptroler of the Customs) で母は Margaret と呼び Strathendry のジョン・ダグラス (John Douglas) の息女であつた。

卷頭に掲げて置いたスミスの母の肖像は武井大助氏の持歸られたものを福田博士の著書にも掲げてある彼女は九十歳までも長命して其獨子アダム、スミスと共に千七百八十四年五月二十三日永眠するまで住んだ慈愛にみちた賢夫人であつた其事は後の節に述べる筈である。スミスの生誕を記念するに當りては第一に生母を記念すべきである。スミス郷里 Kirkcaldy の新聞 The Fifeshire

Advertiser, Saturday, June 2. 1923) 其スミス生誕二百年記念號に同じ母の肖像を掲げて居る。Mother of Adam Smith (Portrait Hitherto Unpublished) であるは即ち夫也) スミスの生れた場所を John Y. Lockhart 氏の Notes に據れば次の如くである。

The house stood in the High street of Kirkcaldy, exactly opposite the present Swan Memorial Hall, and immediately to the west of the close now known by his name.

The street floor was occupied as a warehouse, and the house itself was approached through an entry which occupied the site of the present entry to the first floor of the modern building, now numbered 220 High Street. The original plan of the house, dated 1776, from which a photographed engraving was used for illustration in Dr. Bonar's "Catalogue" is in the possession of the present owners of the property, the Beveridge family, now residing in Edinburgh.....

即ちスミスは Kirkcaldy(Kirkcaldy) の High Street に生れたので現在では同町の二百二十番の處である。私は其家を John Y. Lockhart 氏の案内で見た (Dr. James Bonar 著 A Catalogue of the Library of Adam Smith 参照)

(附註) スミスの郷里は現在では Kirkcaldy を綴らひて居るが私の所蔵する千七百九十五年 Dublin 版 Essays on philo-

sophical Subjects by the Late Adam Smith, To which prefixed, An Account of the Life and Writings of the Author by Dugald Stewart. 此の Kirkcaldy を綴っている。又此論文の第五節に掲ぐるエジンバラ大學の現に所蔵するスミスの書翰中一七五七年三月十一日 (11 March 1771) 附 Kirkcaldy を綴りあるを参照されたし。

## 第二節 幼少の教育

スミスは幼少の折 The Burgh School of Kirkcaldy に學んだ。

(附註) 其際使用した a Latin Schoolbook なるを稱する西曆千七百三十三年五月四日の日附を記入せる古書がスミスの遺品中に加へらるる Kirkcaldy Naturalists' Society の Pet Majorie's House 内に陳列されてゐるのを私は往年 Kirkcaldy 訪問の際に J. Y. Lockhart 氏の案内で見た。

A Latin schoolbook used by Smith when a schoolboy in the Hill Street School, lent by Kirkcaldy Town Council. It bears date 4th May, 1733, and came into the possession of the Civic Fathers Through Professor R. O. Cunningham, Paignton (The Fifehire Advertiser, Saturday, June 2, 1923, Bi-Centenary of Adam Smith, Tuesday, 5th June. The Adam Smith Hall の部分の一節)

(附註) ニーマダム・スミスの學びの Kirkcaldy の寫眞は京都帝國大學經濟學部ニヤム・スミス、生涯二百年記念會の記念繪葉書中に加へられてゐる。

## 第三節 グラスゴー大學在學時代 (Student at Glasgow)

Colleges (1737-1740) (十四歳から十七歳まで)

Smith was no exception, and that deep strong love of all reasonable liberty which characterised him must have been, if not first kindled, at any rate quick-

ened by his contact with, Hutcheson.

John Rae Life of Adam Smith p. 13.

千七百三十七年スミスは年齢十四にしてグラスゴー大學に入學し千七百四十年即ち彼十七歳に達するまで在學し其在學中特に道德哲學の教授 (Professor of Moral Philosophy) たりし Francis Hutcheson に私淑した。其事はジョン・レー氏のスミス傳に詳述してある右に引用せしは其一節である。然しスミスと Francis Hutcheson との關係又スミスとヒュームとの關係は其方面に精通せるグラスゴー大學の現任アダム・スミス記念教授たる Prof. W. R. Scott 氏 (Fellow of the Academy) が Annual Lecture on a Master-Mind (Henrietta Herly Trust) としてアダム・スミス (Adam Smith) と題するスミス生誕二百年記念講演を本年六月五日の記念日に行つて居る。其講演のうちにも詳論されて居る此種の問題は後にスミスの後年の思想を述べる際に譲り今は深く述べない。

アダム・スミスのグラスゴー大學に入學した際のスミスの自署 (autograph in the Matriculation Album) は今尙グラスゴー大學に保存されて居ることである。

(附註) 長崎松尾鐵工場の松尾鶴松氏宛に千九百二十三年六月十九日附にてグラスゴー大學教授 William Robert Scott 氏よりの通信中に左の如く書いてある。



He (Adam Smith) Matriculated in this University at the age of fourteen and his autograph in the Matriculation album is in the possession of the University.

(附註) ニ「アダム・スミスの略歴に就てグラスゴー大學入學者名譜 (The Matriculation Albums of the University of Glasgow from 1728 to 1858 transcribed and annotated by the Late W. J. Addison Registrar of the University)」と題する條次の如くである。

Adam Smith F. Adam Smith Generosi in Kirkcaldy in Com. Fife Born at Kirkcaldy, 5<sup>th</sup> June, 1723. Snell Exhibitioner, 1740 L. L. D. 1762. F. R. S. 1767. Lecturer on Retic and Belles Lettres in Edinburgh, 1748—51. Professor in the University of Glasgow of (1) Logic, 1751—52, (2) Moral philosophy 1752—63, Quæstor therein, 1758—64, Dean of Faculties 1760—62, Rector, 1787—87

Travelling Tutor to the Young Duke of Buccleuch 1764—66, Resident in Kirkcaldy and London, engaged on his great Work, the Wealth of Nations 1766—78. One of the Commissioners of Customs in Scotland, 1778—98. Died at Edinburgh, unmarried, 17<sup>th</sup> July, 1790 Uncle of David Douglas, Granduncle of Wife of Gulielmus B. Cunningham. 自千七百二十八年  
至千八百五十八年  
の  
グラスゴー大學入學者名譜 (The Matriculation Albums of the University of Glasgow from 1728 to 1858) の編纂註釋者たる故 W. J. アディソン氏は同大學の Registrar となつたから歟。

“A Roll of the Graduates of the University of Glasgow” “The Snell Exhibitions” 其他の著作なども前に引用せしグラスゴー大學入學者名譜は千九百十三年グラスゴーの James Macleboe & Sons, publishers to the University より出版せられたものである。

尙序ながら茲に注意すべきことはアダム・スミスの時代のグラスゴー大學は High street にあつたので今のグラスゴー大學の所在地と場所が異つて居る點で

ある。私は今のグラスゴー大學のある處には千九百十五年(大正四年)三月五日に参りて William Smart 教授を訪うた事がある同教授は所謂アダム、スミス記念教授 (Adam Smith Professor of Political Economy in the University of Glasgow) であつた。

#### 第四節 牛津大學ベリオル、カレッジ (Balliol or Balliol College, Oxford)

在學時代 (1740—1746) (年齢十四歳より二十三歳まで)

グラスゴー大學卒業後アダム、スミスはスネル氏獎學金 (Snell exhibitions) を給せらるゝ事となつて郷國スコットランドを千七百四十年の六月出發し英國牛津大學に遊學した。スミスの牛津大學に入學したのは千七百四十年(我元文五年)七月七日である。其證據は故 Professor Thorold Rogers が夙に牛津大學の記録 (official records) に據り考證した處である (Rogers's edition of the Wealth of Nations, I. Vii を引用する John Rae 著 Life of Adam Smith, Chapter III. At Oxford p.p. 18—19) が私自身も大正四年牛津大學に於て其保管されて居る記録中よりアダム、スミスの入學自署を親しく見る事が出來た。其折私の手帳に寫して置いた處を見るに會て Rogers 教授が考證して其編輯せしスミスの the Wealth of Nations 中に記し又 John Rae 氏が其著アダム、スミス傳に轉記する處と大體同じである。たい

Punctuationが一二異つて居る様に私の手帳には書留めてある。寫眞にでも撮つて置いたならばよかつたと今残念に思ふて居る。John Raeの轉記する處によればMatriculation entryに次の如く書いてあると云ふのである。

“Adams Smith e Coll. Ball, Gen. Fil. Jul. 7 mo 1740.”

即ちスミスの入學が千七百四十年七月七日である事はこれにより明かであるがスミスの入學せし牛津大學のBalliol College又其身分を示すGenerosi Filivs(Son of a Gentleman)の意なるラテン語の略字に句點(Punctuation)の附し方が一二異つて居る様である。私のノートには次の如く寫してある。

Adams Smith e Coll: Ball: Gen: Fil:

右の如くラテン語の略字を使用してあるを書き換へると次の如くである。

Adams Smith e Collegio Ballioli Generosi Filivs

英譯すれば Adams Smith of Balliol College, Son of a gentleman

と云ふ事である。BalliolはBaliolとも綴つた例がある。

(附記) 私が右の如きスミスの牛津大學入學の折の自署を見得たのは同大學經濟學教授 Prof. F. Y. Edgeworthの紹介の結果であつたシカシ同教授は未だ曾てスミスの自署を見た事がないと私に語られた。歴史的趣味よりも數學的經濟學に多大の興味を持ち其方の學派に屬する同教授としては當然の事と私は其事實に興味を持つた事を餘事ながら附記して置

く。

又ペリオルカレッジ (Balliol College) を私が参観したのはアーノルド、トインビーの甥に當る Arnold Joseph Toynbee 氏の案内であつた。

ペリオル、カレッジの寫眞は巻頭に掲げて置いた向つて左の古き建物である。

牛津大學に入つて後スミスはグラスゴー大學時代に好める數學を暫くやめて専ら語學に力を注いで勉強した、即ちラテン及希臘語等の古典の研究をはじめとして又佛蘭西の古典的名著 (French Classics) 及伊太利詩人の著作までも讀み耽つた。ペリオル、カレッジ (Balliol College) は牛津大學中にても最もよき圖書室を有して居つたからスミスは其圖書室に入り勉強したのである。私は其圖書室も見た、其圖書室にはアーノルド、トインビー (Arnold Toynbee) の胸像又彼の舊藏書の一部は保存せられ彼を記念する設備はあるがアダム、スミスに就ては何等の記念物もないのは遺憾である。

スミスが古代及近代語に關する知識の廣汎にして且つ正確なりし事は Dugald Stewart の夙に書き傳へた處である(予が所藏の千七百九十五年ダブリン版スミス哲學的論文集に附する Dugald Stewart 稿 An account of the Life and Writings of the Author と題するスミス傳を参照す)



(附註) 右の外 John Rae Life of Adam Smith, Chapter III. At Oxford. The Works and Life of Walter Bagehot Edited by Mrs. Russell Barrington Vol. VII. Adam Smith as a Person p. 5-6等参照。

國家學會雜誌第三十三卷第六號(大正八年六月發行)所載拙稿「再び植民ナル名辭ノ由來ニ就テ」(二)中アダム、スミスに就て記する部分参照。

スミスは七年間牛津大學に在學の後千七百四十六年八月に蘇國に歸り其郷里 Kirkaldy に母と共に住む事となつた。

スミスが牛津大學に入りしは將來英國教會 (Church of England) の教職に就かんが爲であつたが宗教思想上よりもやがて彼はそれを欲せざるに至つたのである。

彼がヒューム (Hume) の Treatise of Human Nature を耽讀して學校當局に譴責されたのは有名な話である。

彼は牛津を去りて以來再び同地を訪問した事はない様である、後年彼はグラスゴー大學の發授となり Glasgow Senate と Balliol authorities と交渉の仲介とはなつたがたゞ其職務上の書簡往復以外に彼の南方大學との關係は全く中絶して居つたとの事である。又牛津大學側にても彼に就て特にインテレストを持たず彼の名聲高くなりし後も彼にドクトルの稱號を與へる事すらせなかつたと

John Rae はスミス傳に書いて居る。

### 第五節 エヂンバラ大學の講師 (Lecturer at Edinburgh) 時代

(1748—1750) (二十五歳より二十七歳まで)

スミスは牛津大學を出で、蘇國の郷里 Kirkcaldy なる母の膝下に滿二年間(千七百四十六年秋より千七百四十八年秋まで)職業もなくたゞ専心研學に耽つて過したが千七百四十八年にエヂンバラ市に出で同市の Henry Home 氏即ちケームス卿 (Lord Kames) の知遇を得て其庇護の下に千七百四十八年より千七百四十九年に至る各期エヂンバラ大學に英文學 (English Literature) の講義をなす事となつた。

スミスがエヂンバラ大學にて試みた英文學の講義の原稿はスミス永眠の少し前に彼の希望により焼き捨てられた原稿の一つである。

スミスは英文學の講義を三年間冬 講義した。而して少なくとも一冬期は經濟學に就ての講義 (Course on economics) を試みた。而して此講義に於て千七百四十九年に案を作り千七百五十年より千七百五十一年に掛けて講義をやつたとの事である。(John Rae 氏 Life of Adam Smith, p. 36)

私は大正四年(千九百十五年)エデンバラに遊び同大學經濟學教授 Professor J. Shield Nicholsonを訪ひ同大學に於けるアダム、スミス關係史料に就て質ねた處同大學にはスミスが同大學講師時代の史料ではないがアダム、スミスが後年に書いた書翰の保存され居るを聞き同教授の紹介で同大學圖書館にて見る事を得た。

スミスは後年(千七百七十八年)蘇國稅務司 (Commissioner of Customs for Scotland) となりエデンバラに住む事となり千七百九十年七月十七日(土曜)同地にて永眠し同地の Canongate Churchyard に葬られたのでスミスの住む家又其墓も過つて居り私は共に其遺跡を訪うたのである。其等の事は後節に譲る事とする。さて前述のエデンバラ大學所藏のスミスの書翰は同大學講師時代のものではないが借覽し寫し取つて置いたから文字の解し難き節二三あれど其儘に左に乍序掲げて置く

Dear Sir,

Your friend lowat has not done justice to my Watch. Since I came to this side of the Water she runs down as fast as a wind her up; the latch, I suspect, 's either much dam-

aged or lost altogether I suppose he has given her to some of his apprentices.

I must now beg that he will take the trouble to look at her with some care himself,

I ever am

My dear Sir

most faithfully and affectionately

Yours

A. Smith.

Kirk Kaldy

11 March 1771.

右スミスの書翰中スミスの郷里を Kirkaldy 〆綴り Kirkaldy 〆綴り居らるる  
を茲に注意して置く(本論文第一節参照)

エディンバラ大學所藏のスミス書翰の他の一通は次の如くである。

(Dr. A. Smith 3 Jan, 1786 about Dr. Websters book of the population of Scotland)

Edin 3 Jan.<sup>ry</sup> 1786

Sir



The accounts of the imports and exports of Scotland, which you wanted, are Sent by this days Post to Mr. Rose.

Since I wrote to you last I have conversed with Sir Heary Moncrieff, Dr. Websters Successor as collector of the fund for the maintenance of clergymens widows, and with his clerk, who likewise clerk to Dr. Webster, and who was of great use to the Doctor in the composition of the very book which I mentioned to you in a former letter. They are both of opinion that the conversation I had with Dr. Webster a few months before his death, must have been the effect of a momentary and sudden thought and not of any serious or deliberate consideration or enquiry. It was, indeed, at a very jolly table, and in the midst of much mirth and jollity, of which the worthy Doctor, among many other useful and amiable qualities, was a very great lover and promoter, They told me that in the year 1779, a copy of the Doctors book was made out by his clerk for the use of my Lord North. That in the end of, that book the Doctor had subjoined a note to the following purpose; that the between 1755—1779, the members in the great trading and manufacturing towns and villages were considerably increased, yet the Highlands & islands were much

depopulated, and even the low country, by the enlargement of farms, in some degree, so that the whole members, he imagined, might be nearly the same at both periods. Both these gentlemen believe that this was the last deliberate judgment with Dr. Webster ever formed upon this subject. the lists mentioned in the note are the lists of what are called examinable persons; that is of persons upwards of seven or eight years of age, who are supposed fit to be publicly examined upon religious and moral subjects. Most of our Country Clergy Keeps examination rolls of this Kind. My Lord North will, I dare to say, be happy to accommodate you with the use of this book. It is a great curiosity, tho the conversation I mentioned to you, had a little shaken my faith in it, I am glad now to suppose, without much reason, I have the honour to be with the highest regard

Sir

Your most obedient humble servant

A. Smith.

## 第六節　グラスゴー大學教授 (Professor at Glasgow) 時代

(1751—1764) (年齢二十七歳より四十歳まで)

スミスのエヂンバラ大學に於ける優れたる講義は早く果實を結び曾て彼が母校グラスゴー大學在學中の恩師たりしグラスゴー大學教授論理學教授論理學教授は修辭學をも講ず) John Louden 先生が千七百五十年の各死するや其空席をふさぐべくスミスは選ばれるに至つた。即ち千七百五十一年一月にグラスゴー大學論理學教授に任せられた。

(附註) W. R. Scott 教授が「アダム・スミス」を題する講演(千九百二十三年六月六日)中に…… in 1751 Smith was recalled to Glasgow to succeed his teacher John Louden, as Professor of Logic and Rhetoric を述べ、論理學教授は修辭學をも兼ね講ぜしによると思ふ、スミスの時代にスコットランド大學にては論理學教授は修辭學美文學 (rhetoric and belles-lettres) とも併せて講ぜし事は John Rae 氏のスミス傳にも書いてある。(同書四十三頁参照)

スミスは翌千七百五十二年(我寶曆二年)に道德哲學 (Moral philosophy) の教授となつた。これ Craigie 教授が病み次で死んだからである。此の如くスミスが論理學教授より道德哲學の教授と轉ずる迄には複雑な事情があつた。スミスはデビッド・ヒューム (David Hume) をグラスゴー大學の教授同僚たらしめむ事に極めて熱心であつたがヒュームの宗教觀が道德哲學の教授候補者として不適

當たらしめた、何となれば其課業は將來スコットランドの教會牧師たらむとする學生の準備教育に關係があつたからである。それ故ヒュームをしてグラスゴー大學教授たらしむるには自分は道德哲學の教授に轉じ論理學教授を空席にしてヒュームを其候補者に推選しなければならなかつた。而して千七百五十年より千七百五十二年の全冬期其空席に對して競争が行はれたがヒュームは遂に論理學教授になり得なかつた。それは Duke of Argyle の反對ありしが爲めであると傳へられて居る。

(附註) この問題に就て John Rae のスミス傳に悉く書いてあるが私の如上の敘述は W. R. Scott 教授の講演附註を主として參考した Scott 教授は尙次の如き事を附記してゐる In addition, though from : If we know of Adam Smith the considerations would not have been an important one to him, the emoluments of the Chair of moral philosophy were somewhat greater than those of the Logic Chair.

其後グラスゴー大學の道德哲學の教授としてのスミスの名聲大に揚り

“His reputation as a Professor was accordingly raised very high, and a multitude of students from a great distance resorted to the University merely upon his account” と稱やうに居る(以上引用せし英文は Dugald Stewart の Account of the life and Writings of Adam Smith に記す處である。J. S. Nicholson 氏による其編纂やつ Wealth of Nations



中に之を引用して居る。)

スミスの論文の公表されたのは Edinburgh Review 誌上にジョンソンの辭書 Johnson's Dictionary) に就て又他の歐洲諸國の文學に就て論文を草して發表したのが始めである。(Dugald Stewart のスミスの生涯及著作に就ての記述並にそれを引用する The Wealth of Nations by Adam Smith with an Introductory Essay and Notes by J. S. Nicholson 中 Introductory Essay 第四頁參照)

スミスの道德哲學の講義は第一は自然神學 (Natural Theology) 第二は倫理學 (Ethics) でこの部分が千七百五十九年出版の道德感情論 (Theory of Moral Sentiments) を著す基となつた。第三は法律學 (Jurisprudence) 第四の部分が後に千七百七十六年出版の An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations. を著す礎となつた。

道德感情論は前述の如く千七百五十九年の出版であるから彼がグラスゴー大學敎授時代に世に出でたものである。私は其第一版を持たぬのみならず第一版は未だ見た事がない。

新しき版は何處にもある。

Wealth of Nations は千七百七十六年の出版でこれは勿論グラスゴー大學教授時代のものでなく遙に後年のものである。道德感情論よりも十七年後の出版であるこの第一版は我國にても所有して居る學校圖書館、個人も少なくない、私も二部所有して居る。それに就ては後節に於て之を述べる。

さてスミスはグラスゴー大學教授たる事十三年、西曆千七百六十三年彼の年四十歳に達した時は彼がグラスゴーに於ける最後の年であつた (John Rae 著 Life of Adam Smith Chapter XI. Last year in Glasgow 1763. Act. 40 とある部分参照) の理由は彼が其翌年即ち千七百六十四年二月には早く既に佛蘭西巡遊 (The Tour in France) の途に Young Duke of Buccleugh を伴うて出發する事となりこれが爲めにグラスゴー大學教授を辭したからである。佛國巡遊、歸國後の大著述 Wealth of Nations 等スミスの生涯の最も大切な時代の事は節を改めて次號に譲る事とする。